成安造形大学紀要 13, 2022-3

「みえないもの」制作とその後

INVISIBLE - creation and thereafter

田辺　由子
Yoshiko TANABE

「みえないもの」制作とその後

INVISIBLE - creation and thereafter

田辺　由子
Yoshiko TANABE
教授（空間デザイン領域：テキスタイルアート）

I had a solo exhibition titled INVISIBLE at a gallery in Kyoto in June 2020. The work grew and was re-exhibited in a different form at the Takarazuka Art Centre in March 2021. Another solo exhibition with the work was supposed to be held in Utsunomiya in September of the same year, but was cancelled due to the COVID-19 pandemic.
During the creation period in the first half of 2020, the news from overseas about the pandemic was quite serious. Domestically, the general public was still optimistic, whereas it was a constant source of anxietry for me as there were a lot of unknown facts about the novel coronavirus. The title INVISIBLE reflects my vague anxiety of that time. Even though this invisible thing – the unknown virus – has been gradually visualised by a number of studies, a lot of unresolved issues remain about its presence in society. In this essay, I write about what has been gradually revealed through the series of events and how it is related to my creation.

はじめに

2020 年 6 月に個展「INVISIBLE」［図 1，2，3，4］を京都市にて開催した［註 1］。その後、同作品は 2021 年 3 月、宝塚市にて展示形態を変更し、作品タイトル「みえないもの」［図 5］として再展示された［註 2］。さらに同年 9 月には宇都宮市のギャラリー［註 3］でも展示予定であったが、国内における COVID-19 パンデミックの深刻さから開催を断念した。

制作期間の 2020 年前半はニュースで見聞きする海外での状況は深刻であったが、国内では初めての緊急事態宣言は出されたものの身近なところに直接的な被害はなく、短期間で終息するとの見方が大勢であった。一方で新型コロナウイルスについてはよくわからないことも多く、そのことが自身の不安の中心にあった。

INVISIBLE というタイトルは当時の漠然とした不安が投影されたものだ。タイムリーな時勢を表現するタイトルをつけることに対して、個展開催時の夏頃にはコロナ騒ぎは治っているかもしれないが、見えないものに対する意識は当然ウイルスだけに向けられたものではなく、表現として幅広くとらえてもらいたいとの思いがあった。

図１　個展（ギャラリーギャラリー：京都）撮影：矢野誠

以下に展覧会の際に出した作者コメントを記す。

見えないものはなかなかしぶとい。
地中の根っこ、放射能、未知のウイルス、人の心。
私は紙を捻（ひね）り、こよりをつなげることで、見えないものに対峙する力を得ている。

その後、数回の感染拡大の波に見舞われるも世界中で膨大な研究が進められ、COVID-19 は未知のものではなくなった。一方、ウイルスは変異を繰り返すことで新たな状況が発生、その速度に人知は追いつけず、当初の未知のものに対する畏怖の念から、先が見通せない不安にフェーズが変わりつつある。

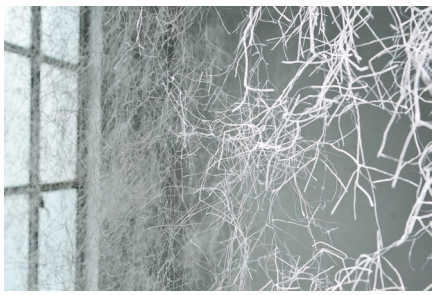

図2　作品細部　撮影：矢野誠

図3　作品細部　撮影：矢野誠

1. 暗闇の中の見えないもの

近代化以前の電気がなかった時代、先人たちは暗闇の中でも見えない存在を感じ取っていたと推測される。一方、現代においては本当の暗闇に遭遇することはなくなり、人工の明かりによって人生のすべての時間を見える世界に身をおくことになった人は、唯一自ら目を閉じることでしか見えない世界を体験できなくなった。

現代人にとっての暗闇は目を閉じることであり、そこには何も見えない。つまり暗闇とは何も存在しないことであり、現代人にとって見たくないものは存在しないことになる。見るか見ないか、オンかオフか、1か0かの選択の世界である。

近代化以前の人にとっての暗闇は奥行きのある深い空間であり、人生の半分を占める生活の一部として光と闇はグラデーションでつながっている。暗闇の中、あらゆる感覚を使い見えないものを見ようとする意識が働くことで、おぼろげながら見えてくるもの、それでもなお見えない曖昧な領域のものはそのままに、見えないものの存在を認め、折り合いをつけ、恐れることが人の想像力をかきたててきたのだろう。

2. 視覚と触覚

現代は他者のイメージを簡単に可視化できる世界だ。絵画や漫画、写真、映像、アニメ、ゲームなど、多彩な表出物を消費することによって人は何倍もの人生を体験できるが、そのほとんどは視覚情報に偏っている。奥行きのない視覚情報を切り貼りしつなげることによって新たな創造物が再生産され、表現の主流ともなっている。

人は視力において優れており、文明に欠かせない生産的な仕事をする上で視覚情報が重要であることに疑いの余地はないが、同時に長い人類の歴史をとおして、手を使い作業することで手に特化した触覚を発達させてきたことも忘れてはならない。

近代化以前、電灯が一般に普及する前の世界では、視覚情報以上に触覚情報、手の感覚が物作りにおいて重要だったのではと推測する。これは卑近な例だが、私自身は日中の光の中で作業することが常であり、夕方ごろになると人工光のない手元はあやふやになるものの、不思議と慣れてくると手の感覚を頼りにある程度作業を続けることができるものだ。色彩を使用せず素材の質感と構造そのものに重きを置いた制作スタイルであればこそ可能なのだが、移ろいゆく視覚に対する触覚の熟練による確実性を実感している。

何かのイメージの再現ではなく、自然の摂理に基づいた空間における関係性を表現するために、おぼろげな形を手の感覚で明確にしていく過程において、一個人のイメージしうる範囲を超えるものが偶然の要素をも含みながら素材の特徴と相まって生まれてくる瞬間

図 4　作品と来場者

図 5　テキスタイルの未来形（宝塚市立文化芸術センター）

を大切にしている。

3. 制作過程と展示

この作品は、工業製品を解体する行為と、紙縒（こより）という昔ながらの手作業の組み合わせで成り立っている。

具体的にはポリエチレン繊維でできたネットを裁断し、紐（ひも）の縒（よ）りをほぐして２本縒（よ）りまでにする。その縒りの螺旋の隙間に細く裁断された紙を半分まで通し折り曲げて、２枚を重ねるようにして紙縒（こより）を作る。半透明のポリエチレンに真っ白な紙縒（こより）が植え付けられたようになり、自然光の下ではポリエチレンの繊維は認識しづらく、紙縒（こより）が宙に浮いて見える効果がある。

使用する紙縒（こより）の紙は、元々は機械漉（す）きの和紙を工業的に細く裁断する過程で生まれた端の部分の廃棄物を生産現場からもらい受けたものである。この紙の原料はマニラ麻で機械漉（す）きの和紙の原料として一般的なものであるが、化学繊維であるポリエチレンと天然繊維で作られた紙という硬さも性質も違う異質な素材を一体化することで、形はより複雑になった。木の根のような形状のユニットを展示の際に重ねたり引っ掛けたりすることでお互いが絡まり合いさらに密な群生を作っていく。

個展会場のギャラリーでは、空間を使ったインスタレーションとして４枚の群生をスクリーンのように垂らした。その中に人が入れるように構成し、身体の周りを覆うことによって、漠然とした不安から自らを守るシェルターの役目を持たせた。

８ヶ月後の他会場での展示場所は空間ではなく壁面ということもあり、同じピースを使いながらも作品としての見せ方を大きく変えた。白いベースに白い作品ということで、ほんのりとした照明の下、形状は遠目では識別しづらく靄（もや）のように見える。鑑賞者は近くに寄って初めてその密な存在を意識するようになる。そして壁に映り込んだ影が実際の物質以上に存在感を放っていたことにも気づく。物質として存在するものと存在しないもの、視覚的に見えるものと見えないもの、見えないが存在するものとイリュージョンが微妙に混在する展示となった。

4. 現代において見えないもの

タイトルの「みえないもの」について、制作当時は目視できない微かな存在や表面に現れない隠れた存在が意識の念頭にあったが、発表から１年以上を経て、見られる対象としての存在よりも見る主体としての人に意識が向くようになってきた。人々は見えないものを見ようとしているのか、見たくないから見えないのか、それとも存在に気付けないだけなのか。

我々はシンプルなものを好ましく感じる。洗練されたデザインやアスリートの無駄のない動き、わかりやすい説明、マニュアルどおりにすれば解決するタスクなど、理解に時間を要しない物事は現代人にとっての理想のかたちである。対極にある予測不可能なもの、複雑に絡み合ったもの、いびつなもの、すぐには解決できそうにない問題からは距離を置きたいと思うのが人の常だが、すでに我々の身辺はそのようなものであふれている。そこから逃れることは困難でも、自ら目を閉じて存在しないことにするのは容易であり、そうすることでなんとか心身を保っている。ゆえに、あえて目に見えないものを可視化すること、この時代に見えてこないもの、見たくないものに視線を向けて、暗闇のグラデーションの中に存在する何かを拾い上げ共有すること、そのひとつの方法である芸術表現によって人は心揺さぶられるのだ。

［註 1］「INVISIBLE」
会期：2020 年 6 月 27 日～ 7 月 12 日
場所：ギャラリーギャラリー
［註 2］「JTC テキスタイルの未来形 in 宝塚 2021」
会期：2021 年 3 月 6 日～ 28 日
場所：宝塚市立文化芸術センター
［註 3］ ギャラリー・イン・ザ・ブルー